

詩篇 119:161-168

- 161 君主らは、ゆえもなく私を迫害しています。しかし私の心は、あなたのことばを恐れています。
- 162 私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。
- 163 私は偽りを憎み、忌みきらい、あなたのみおしえを愛しています。
- 164 あなたの義のさばきのために、私は日に七度、あなたをほめたたえます。
- 165 あなたのみおしえを愛する者には豊かな平和があり、つまずきがありません。
- 166 私はあなたの救いを待ち望んでいます。主よ。私はあなたの仰せを行っています。
- 167 私のたましいはあなたのさとしを守っています。しかも、限りなくそれを愛しています。
- 168 私はあなたの戒めと、さとしを守っています。私の道はすべて、あなたの御前にあるからです。

שָׁרִים רָדְפוּנִי חָנָם וּמְדַבְרֶיךָ פָּחַד לִבִּי:
 שֵׁשׁ אֲנֹכִי עַל־אִמְרֹתֶיךָ כְּמוֹצֵא שָׁלַל רֶבֶב:
 שָׂקַר שָׁנֵאתִי וְאַתְעֵבָה תּוֹרֹתֶיךָ אֶהְבֵּתִי:
 שִׁבְעַת בַּיּוֹם הִלְלֵתִיךָ עַל מִשְׁפָּטֶיךָ צְדָקוֹתֶיךָ:
 שְׁלוֹמִי רַב לְאֵהָבִי תּוֹרֹתֶיךָ וְאֵינֶן־לָמוֹ מְכַשׁוּלִים:
 שִׁבְרֹתַי לִישׁוּעָתֶיךָ יְהוָה וּמִצּוֹתֶיךָ עֲשִׂיתִי:
 שָׁמְרָה נַפְשִׁי עֲדוֹתֶיךָ וְאֶהְבֵּם מְאֹד:
 שִׁמְרֹתַי כִּפְקוּדֹתֶיךָ וְעֲדוֹתֶיךָ כִּי כָּל־דַּרְכֵי נִגְדָּדִים:

第二十一字「シン」。文字の右上に点が付くと「Sh」、左上に付くと「S」という発音になります。

שָׁרִים (שר) /サーリーム (サル) …王子、支配者、リーダー、長 (161)

שֵׁשׁ (שש) /サーズ (スーズ) …喜ぶ、狂喜する (162)

שָׁנֵאתִי (שנא) /サーネーティー (サーネー) …憎む (163)

שִׁבְעַת /シェバー…七 (164)

שְׁלוֹמִי /シャーローム…平和 (165)

שִׁבְרֹתַי (שבר) /シンバルディー (サーバル) …調べる、調査する (166)

שָׁמְרָה (שמר) /シャームラー (シャーマル) …保つ、守る、見守る、注意を払う (167, 168)

この箇所の特徴は、第一に祈願がないこと、第二に 161 節を除いてすべての節が前向きなことばで満ちていることです。動詞を拾い集めてみましょう。「喜びます」(162)、「愛しています」(163, 167)、「ほめたたえます」(164)、「待ち望んでいます」(166)、「行っています」(166)、「守っています」(167, 168)。喜び、愛、行動の動機は「神のことば」であって、詩人の人生を豊かに作り上げています。彼の境遇に何の問題もなかったわけではなく、161 節では「君主らは、ゆえもなく

私を迫害しています」と苦しい現状を主に伝えています。「偽りを憎み、忌みきらい」(163)とは、偶像礼拝について言われているようで、カナン人の宗教がイスラエルに持ち込まれることへの嫌悪を表しているのでしょう。古来よりカナン人は、子どもの生き血をすするという儀式を悪魔との契約の下に行なってきました。更に、それが発覚したときには裁判官をカネで買収し、事実を揉み消すのが常套手段だったようです。宗教とカネはこのようにして手を結び、古今東西の裁判を歪めてきました。

しかし、そのような隠れた現実を知りながらも、詩人は「神のことば」によって勇気づけられ、励まされ、喜びに満ち溢れていました。「大きな獲物を見つけた者のように」(162)とは、御言葉の中に新しい真理を発見したときの喜び。人間世界の悪しき裁判を打ち砕く「神の義」が現れるのを目にするとき、詩人は一日に「七度」も主を誉め讃えました。朝6時、9時、正午、午後3時、6時、9時、0時という3時間ごとの賛美が詩人の習慣だったのでしょうか。仕事でも、家事をしているときも、食前も、一日の初めも終わりも、手を休めて主を想う生活を心がけていたのでしょう。

「平和(シャローム)」(165)は「みおしえを愛する者」の内にあると言われます。このところから、主イエスの御言葉を思い起こしました。「神から出た者は、神のことばに聞き従います」(ヨハネ8:47)、「だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません」(ヨハネ8:51)。このところから、詩人が言う「平和」とは「神との平和」を表しているということが読み取れるでしょう。そして、神との縦の関係が平和であるところには、人との横の関係にも平和がもたらされていくのです。

166～168節では、繰り返し詩人が「私はあなたの仰せを行っています」「私のたましいはあなたのさとしを守っています」「私はあなたの戒めと、さとしを守っています」と、まるでパリサイ人の発言とさえ受け取られかねないほど「神の法」の遵守を訴えています。ただ、この詩人について言うならば、御言葉を守ることに先立って、御言葉への愛、神への愛が置かれているということを加えておかななくてはなりません。「あなたのみおしえを愛しています」(163)、「限りなくそれを愛しています」(167)と。同じ行為であっても、愛を動機としているか、憎しみを動機としているかで、その意味は正反対になってくるのです。私が尊敬するM先生は、信徒の神学教育のために『神を愛するための神学講座』という本を書かれました。この本のタイトルの通り、ただ知識を詰め込むために神学を学ぶのではなく、「神を愛する」という明確な目的がそのゴールに置かれることは大切です。聖書を読むとき、このゴールを常に目の前に置きましょう。いえ、むしろ神が如何に私たち罪人を愛してくださっているかを読み取るために聖書を開くのです。そのことが理解できるとき、私たちは「大きな獲物を見つけた」(162)のような喜びに満たされることでしょう。